

チキータは、遊びの中から偶然に生まれたテクニック。 この技術を使うことで、僕が得意とするラリー戦に 持ち込むことができる。



Petr Korbel

【プロフィール】
Petr KORBEL (ピーター・コルベル)
生年月日：1971年6月6日
国籍：チェコ 出身地：ハビロフ
身長：181センチ 体重：73キロ
世界ランキング：19位
主な戦績：2000年ヨーロッパ選手権大会3位
1996年アトランタオリンピック4位
使用用具：ラケット=コルベルFL
ラバー=フォア面、スレイバー-G2(赤、MAX)
バック面、スレイバー-G2(黒、MAX)

『チキータ』の由来はチキータ・バナナ
バックハンドの横回転系フリップを生み出したコルベルは、この技術を「チキータ」と呼ぶ。その名前の由来は、何か？ 以下に、コルベルの言葉を借りよう。
「このテクニックを『チキータ』と呼び始めた理由は単純。この技術のボールの軌道が、まるで果物のバナナのようにカーブするから、バナナの世界的な有名ブランドである「チキータ (Chiquita)」から名前を取って、そう呼ぶようにしたんだ。サッカーでも、よく曲がる(カーブを描く)シュートのことを「バナナ・シュート」と呼ぶよね。それと同じこと」
このように、「チキータ」の名の由来は、打球の軌道が果物のバナナを連想させることによる。「チキータ」の練習に取り組むときは、ボールに回転をかけるのと同時に、「チキータ・バナナ」のようにきれいな曲線をイメージしてみよう。そうすることで、上達が早くなるかも!?



写真提供：株式会社チキータ コーポレーション

「チキータは台上技術の「ちょっとしたスライス」

「チキータは、コルベル選手が世界で最初にやり始めた技術ですが、この技術を実践するようにするのは、けっこう難しいです。コルベル、僕がチエゴのジュニア・ナショナルチームにいたころだったと思う。今から15年くらい前だね。最初のころは、この打法を「新しい技術だ」と意識していたわけではない。チキータは、練習の合間などに友だちといろいろな打ち方をして遊んでいた中から、偶然に生まれた技術なんだ。」

「実戦で初めてチキータを使ったのは、いつですか？」

コルベル「初めてチエゴ代表として出場した1990年のヨーロッパ選手権大会の団体戦。チエゴが、ディン・イーとチャン・チャンリ(ともに右ハンドソフト速攻型で元中国選手)のいるオーストリアと対戦し、その試合で初めてチキータを試してみた。」

「その試合の中で、「この技術は世界で使える」という手ごたえをつかんだわけですか？」

コルベル「イエス。ディン・イーとチャン・チャンリの2人と対戦し、それぞれの試合でチキータを使ってみたら、ベンホルダーの2人は明らかにパニック状態に陥った。相手が僕の打球の曲がり方を予測できず、大きく空振りしたことを覚えていますよ。」

「この試合で何度かチキータを使ってみたいけど、相手は最後まで」

「バックで対応するべきか、回り込んでフォアハンドで打つ方がいいのか」と迷っていたようだった。当時は技術的に未熟な部分が多かったため、リードを奪っているときにしか使うことができなかったけれど、チキータで相手をかく乱し、当時のヨーロッパでトップ選手だったディン・イーとチャン・チャンリという2人の強敵に連続で勝つことができた。そのときに「チキータを使える」という確かな手ごたえをつかんだよ。」

「チキータを使うことで、自分のプレーにどのような効果が得られると感じていますか？」

コルベル「台上技術のプログラムの中にチキータを組み込んだのは25歳のころ。チキータをするとはほとんど場合、相手はストロップできない。だから、チキータを使うことによって、自分が得意とするラリー戦に持ち込むことができる。また、ボールの回転の影響で、チキータをするとバック側に返ってくるのが多いという点も、僕にとって大きなメリットだと感じている。」

「ただし、チキータはストロップやツツキなどの基本的な台上技術の中に「ちょっとしたスライス」として加えるもの。台上で先手を取るために技術のバリエーションを増やすという考え方でとらえている。なぜなら、チキータを使うことでデメリットもあるからだ。それらは後述することとして、まずは次ページからチキータの基本打法を紹介しよう。」

【KORBEL's Weapons】



スレイバー-G2 スレイバー-G2



コルベルFL

ラバー=フォア面、スレイバー-G2(赤、MAX) / バック面、スレイバー-G2(黒、MAX)
FL100x24mm

